Q11　どうやって工事をしたの

当時は、当然現在のように重機や工作機はありません。コンピューターもありませんでした。

すなわち、石を切り出すにも、細工するにも、運ぶにも、組み立てるにも人力に頼らざるを得ません。大変な事だったと思います。何せ木材と違って、石材は重いし、加工がしにくいのですから。

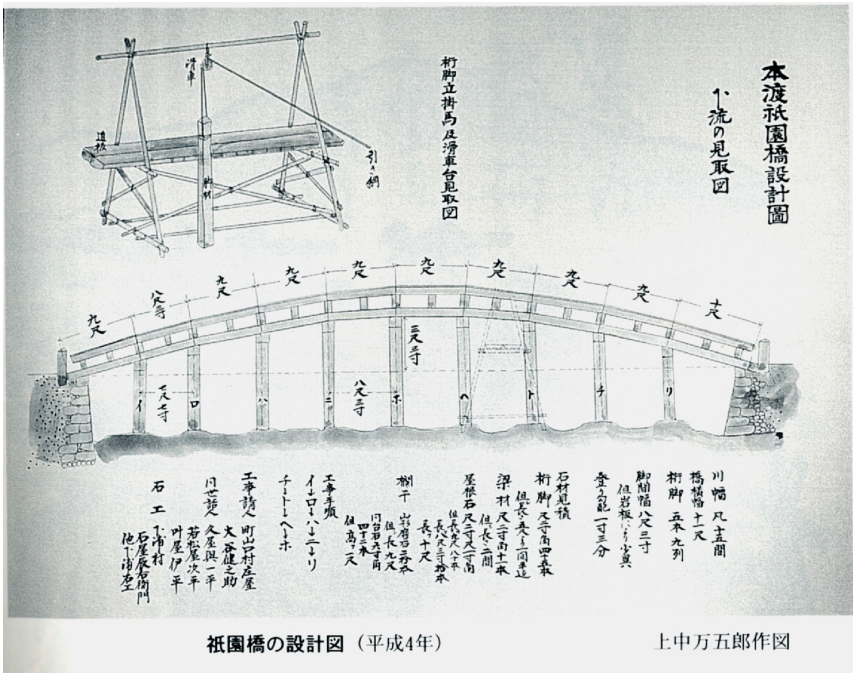
設計図や工事方法が残っていませんので、想像するほかはありませんが、私のような建設の門外漢には、想像さえも出来ません。

しかし、昔の人は知恵がありました。現在では、到底考えられないような大工事をたくさん行っているのです。

例えば、大坂城や熊本城の石垣の大石。どうやって切り出し、運び、どうやって積み上げたのでしょうか。仮に頭で考えても、実際の工事となると、気の遠くなるような困難さが伴います。

また、昔の人は、身体的には現代人より劣っていますが、力と根気、根性は現代人が及ばないことが、容易に想像できます。

私たちは、祇園橋を見て、美しいな、よく残っていたな、くらいしか考えませんが、時には、もしこれを人力で建設したとしたら、どんなに大変だろうと、昔の人の労苦に思いを馳せるのも、文化財の保護という観点から必要な事ではないでしょうか。



上中万五郎氏作図による「本渡祇園橋設計図」　『国重文の祇園橋』より転載

もし、現在の技術と機械力を持ってしても、この祇園橋を造ることは、容易ではないでしょう。

匠の技と、人々の根気が、この橋に宿っているといっても過言ではないと思います。

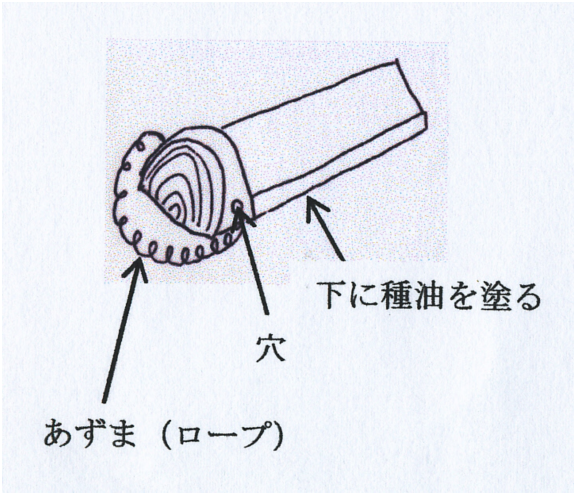
でも、石の切り出しから建設まで、項目別に素人ながら考えてみたいと思います。

切り出し・加工

石の切り出しは、どのようにして行われたのでしょうか。石を岩から切り出すには、穴を一列に穿ち、その穴にくさびを打ち込むと、岩が割れるということです。現在は、削岩機やドリル、あるいは膨張剤などがありますが、当時は、そんなものはありませんので、鑿でこつこつ時間をかけて行ったことでしょう。現在からすれば、気の遠くなるような作業です。

余談ながら、私の畑の真ん中に、大きな石がありますが、とても掘り起こすには困難なので、割ろうとしましたが、なかなか割れません。そこで思いついたのが、球磨川の水運を妨げていた、亀石という巨石を割った方法です。つまり、岩の上で火を焚き、岩が充分温まった所で、水をかける。その結果、破片となって割れ、ずいぶん小さくすることができましたが、全て取り除くことは出来ませんでした。

とにかく、木材と違って、石の加工は大変な事です。



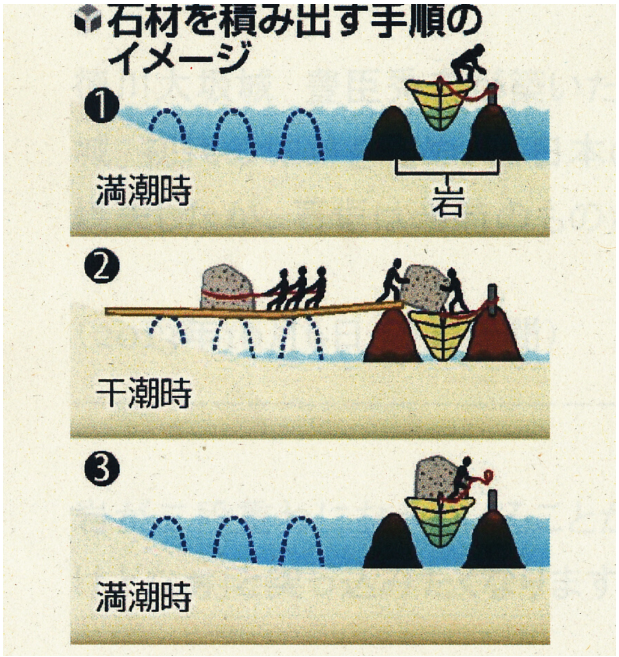
運搬

更に厄介なのは運搬です。何トンもある石を運ぶことは容易ではありません。その重たい石をどうやって運んだかと言うと、コロとソリを利用して運んだようです。しかし、

石材の運搬方法

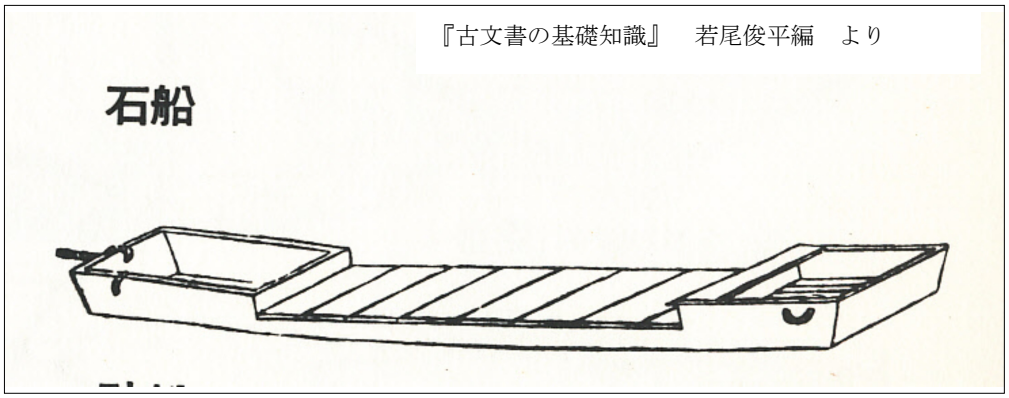
1　山丁場から道まで
　スラセ（木馬・キンマ）で運ぶ
　急な坂--松材
　平道----樫材
2　道から船着場
　o 荷馬車
　o 牛車
※　海上輸送の方法については記述無し

〈下浦石工物語　金子久明編〉より



巨石運搬の項は、「古代巨石文化探検部～　インディー・ジョーンズ倶楽部
http://ancient-megalith.info/?p=267 を拝借、又は参考にさせていただきました。

『古文書の基礎知識』　若尾俊平編　より



団平船（だんべいぶね）

和船の一。幅が広く、底を平たく頑丈につくった船。石・材木・石炭・土砂などの重量物の近距離輸送に用いた。

goo辞書より

そのコロとソリで、石場から祇園橋の建設現場まで運ぶことは、できません。なにしろ当時は道路がほとんどありませんでした。例えあったとしても、最大の難関が瀬戸海峡です。瀬戸海峡に橋が架かったのは、ずっと時代は下り、大正十二年のことです。

そこで考えられるのが、海上輸送です。まず、コロとソリで海岸まで運び、その後団平船かいかだで運んだと考えられます。現在ならクレーンで大型船に積み込み、運ぶことができますが、船に積み込むだけでも、大変な作業です。

それでは、どうやって積み込んだのでしょうか。

参考になるのが、次のことです。

大坂城は豊臣秀吉が築きましたが、現在の大坂城は徳川が秀吉時代よりも規模を拡大して築きました。現在みられる石垣は、徳川が築いたものです。

その石垣には１００トンもの巨石が使われています。その石は瀬戸内海を運んできたことが分かっていますが、どうして運んだかは謎でした。そこで、同志社大学文化遺産情報科学研究センターが、香川県小豆島で、積出港跡の遺構を発見しました。

その遺構は、石切り場に近い海岸の40～50ｍ沖合に、二つの岩が並んでいました。幅２～４ｍ、奥行き２～３ｍ、海底からの高さ３ｍというものです。これは、ともに石を２段重ねに積み上げた人工物であることも分かりました。また、岩と浜の間には、人工的に置いたとみられる加工石材が約50個散乱していました。

そこで、この遺構が、巨石を船に積み込んだものという事がわかったという事です。

そこで、積み込みの方法を推測しました。

① 満潮時に二つの岩の間に船を入れ、石柱にロープで係留する。

② 干潮時に沖合の岩まで桟橋を渡し、石材を運び、船に搬入。

③ 満潮になると、船が浮かぶので、出航。

なるほど、昔の人の知恵には感心するばかりです。それでも、大変な作業ですね。

下浦から、祇園橋建築現場まで、石材を運んだのも、これと同じような方法だったと、私は思っています。祇園橋だけでなく、鳥居など巨石を使った建造物は天草各地に多く建てられています。

もし、これらの遺跡が、下浦海岸に残っていたらと思うと、ワクワクしますが、残念ながらその痕跡もありません。ただし、私的に素人考えでは、もっと簡単な方法があります。それは、干潮の時、満潮時深くなる所へいかだを置き、そこまで石を運んでいかだに載せる。満潮になったら、いかだが浮かび上がるので、いかだを建設現場まで曳航する。これだと、先の設備も作る必要もありません。

このように、自分なりに考えるのも楽しいものですね。

建設

眼鏡橋の場合は、ほぼ建設の方法が解明されているようですが、桁橋はどうなんでしょう。どちらにしても、まず、木材で、枠や支柱を組み、そして一つ一つ柱を立て、梁を乗せていったものと思われます。使用された木材もそれ相当の大きさと数が要求され、石橋の棟梁と同時に、大工さんも重要な役割に関わっていたことは、間違いないでしょう。

現在でも、足組みを組んで、本体建設に取り掛かる工事現場をよく見かけます。国宝姫路城の大修理が行われていますが、その天守閣をすっぽり囲むほどの足場が組まれています。

祇園橋の場合も、大がかりな足場が組まれたと思います。足場が組まれたら、工事の半分以上は完成したのかもしれません。勿論素人考えですが。

とにかく、大変な苦労をして、建設したことには違いありません。費用のこともありますが、人力だけが頼りの時代、延べ何人の方が、この祇園橋の建設に携わったのでしょうか。

造成中の祇園橋　画・上中万五郎　　『国重文の祇園橋』より

Q12　いくら費用はかかったの

これも難問です。

記録が残っていないので、詳細は分かりません。

ただ、架橋碑に寄付をした人の名と金額等が記されていますから、それを詳細に分析すると、ある程度の費用は計算できるかもしれません。

石切や組み立てなどの専門的業務に就く人には、当然手当てが支給されたと思いますが、一般に工事に携わっていた人は、大半今で云うがボランティアだったものと思われます。

参考までに、架橋碑に記されている人を一部列挙してみます。

一銭　五百目　鈴屋虎吉
一米一石二斗　村方
一同　五百目　泉屋富士太郎
一籾壱石　山口掛
一同　五百目　後藤善右衛門
一同八斗五升　川原、中山口
一同　九十目　井筒屋平吉
一同二石八斗　船尾掛
一同　四十五文目　皿屋伊七
一同二石八斗　浜津
惣村中軒別二百文加勢
一銭二貫目　大和屋龍吉
松屋清兵衛

その他多数の人の名が刻まれていて、かつ刻まれていたと思われるが、石面が剥離欠落して判読不能です。

（「国重文の祇園橋」より）

銭一目が、今日に換算するといくらになるか、私には分りませんが、惣村中軒別二百文加勢とあることから、村挙げての工事だったことがわかります。

架橋記念碑に刻まれた寄付者の氏名

Q13　祇園橋の所有者は誰

河川は熊本県の管轄、川の両サイドの道路は市道です。では、橋の所有者（管理者）は誰でしょうか。

「本渡市の文化財」（平成十五年発行）によると、本渡市になっています。現在は市町村合併により、天草市になっています。ただし文化庁の登録では当時の本渡市になっています。

ただし、登記上の所有者は市であっても、貴重な歴史遺産です。市民全員が所有者といった感覚を持ちたいものですね。

Q14　いつ国指定重要文化財に指定されたのまた、その意義は

まず、昭和三十三年に本渡市の指定を受け、昭和五十年に熊本県の指定文化財となりました。

そして、平成九年に（十月十七日答申・同年十二月三日告示）、国指定の重要文化財に指定されました。

指定する場合、特別のことがない限り国の方から積極的に調査して、指定することはまずないと思います。ノーベル賞だって、推薦が必要です。そのため国指定を得るためには、関係各位の大変な努力があったと聞いています。

地元の人はいつも見ているわけですが、逆にそれだからこそ、それがどれだけ価値があるものか見えないところがあります。灯台下暗しということです。

でも、早くからこの橋の価値を認めていた、近くに住む地域史研究者の鶴田文史氏は、国の指定を得るために、中心となって運動を開始しました。

鶴田氏は、架橋三世話人の一人「叶屋伊平」の末裔に当たるとのことで、そういう意味からも誰よりも祇園橋に強

国指定重要文化財指定の標柱

い愛情を持って、祇園橋の研究と共に、保存・県や国指定への運動を取組んでこられました。

鶴田氏が発起人となり、共鳴する仲間とともに、平成四年九月二十七日に、「祇園橋と町山口川の環境を守る会」が結成されました。

会長は、天草文化協会長・堀田善久氏、副会長は前出の西海文化史研究所主宰の鶴田文史氏など四名。常務理事として、各区の区長など八名。理事、区長など九名。他に、事務局長や次長、監事に近くの商友会の人などを配置し、顧問としては、市議会議員や各団体の長などの有志で構成されています。（肩書は当時）

会の名称は、ただ単に祇園橋の指定を得るという事だけでなく、環境が悪ければ、価値がないという、日本の石橋を守る会事務局長・山口祐造氏の講演を聞いて、祇園橋と同時に周辺の環境整備が大切と知ったため、〝町山口川の環境〟を入れました。

近年、祇園橋近辺は、コンクリート護岸工事によって、かつて繁っていた柳などの樹木も一本を残して無くなり、味けない景観になっている。こうした環境整備にも力を入れようと考えました。

守る会では、市や県に働きかけ、運動開始からわずか五年で、指定を取りつけました。普通十年はかかるというのに、その半分の年月で成就したのには、会の熱心な取組や当局の熱意ある動きもさることながら、祇園橋が持っている価値が、それだけ素晴らしかったことを物語っているのではないでしょうか。

Q15　重要文化財とは？

国宝とか重要文化財等は、「文化財保護法」という法律によって、規定されています。

この法律の第二条、（文化財の定義）で、祇園橋に関係あると思われるものを抜き出してみると。

一　建造物、絵画、彫刻、工芸品、書籍、典籍、古文書その他の有形の文化的所産で我が国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの（これらのものと一体をなしてその価値を形成している土地その他の物件を含む。）並びに考古資料及びその他の学術上価値の高い歴史資料（以下「有形文化財」という。）

四　貝づか、古墳、都城跡、城跡旧宅その他の遺跡で我が国にとって　歴史上又は学術上価値の高いもの、庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地で我が国にとって芸術上又は鑑賞上価値の高いもの・中略・（以下「記念物」という。）

五　地域における人々の生活又は生業及び当該地域の

風土により形成された景観地で我が国の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの（以下「文化的景観」という。）

六　周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値の高いもの（以下「伝統的建造物群」という。）

を重要文化財に指定することができる」とうたっています。

その他「重要文化財としての価値を失った場合指定を解除できる。」第二十九条。つまり、壊れたり、価値を失う改変・改造などが行われた場合で、当然のことです。

法律の条文は、難解ですが、興味のある方は一度目を通してください。

今は、分厚い六法全書を買わなくても、簡単にインターネットで検索できます。

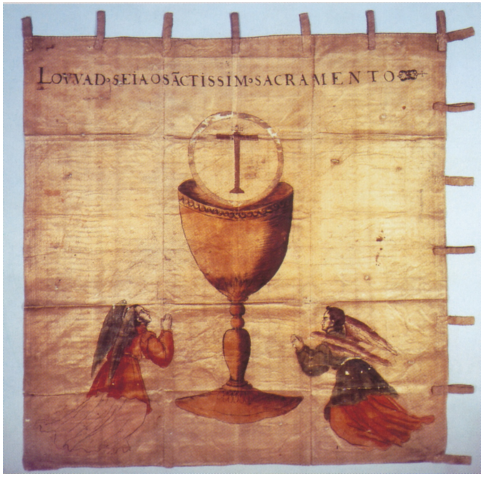
Q16　どのように登録してあるの

文化庁のホームページに「国指定文化財等　データベース」には、祇園橋はどのように登録してあるのでしょう。

次ページに指定書と共に掲載しています。

そのなかで、重文指定基準の項目で、「（五）流派的又は地方的特色において顕著なもの」となってます。

これは、「国宝および重要文化財（建造物）指定基準」



祇園橋と共に、天草の至宝・国指定重要文化財
左・首塚（苓北町富岡）
右・天草四郎陣中旗（天草キリシタン館蔵）

〈祇園橋説明板〉

祇園橋　国指定重要文化財（平成９年12月3日指定）

この石橋は、天保３年（1832年）町山口村庄屋大谷健之助が発起し架設したもので、祇園神社の前にあることから、祇園橋と呼ばれています。石造桁橋では日本最大級で、長さ28.6m幅3.3mあり、45脚の石柱により支えられています。下浦村（現下浦町）石屋の辰右衛門により建造され、地元の砂岩が使用されています。

この付近は、寛永14年（1637年）11月、天草・島原の乱で、天草四郎率いる一揆勢と富岡城番代三宅籐兵衛の唐津軍とが激突した場所です。両軍の戦死者により川の流れは血に染まり、屍は山を築いたと伝えられています。

熊本県（観）

（他に英文、ハングル、中国語の表記があるが省略）

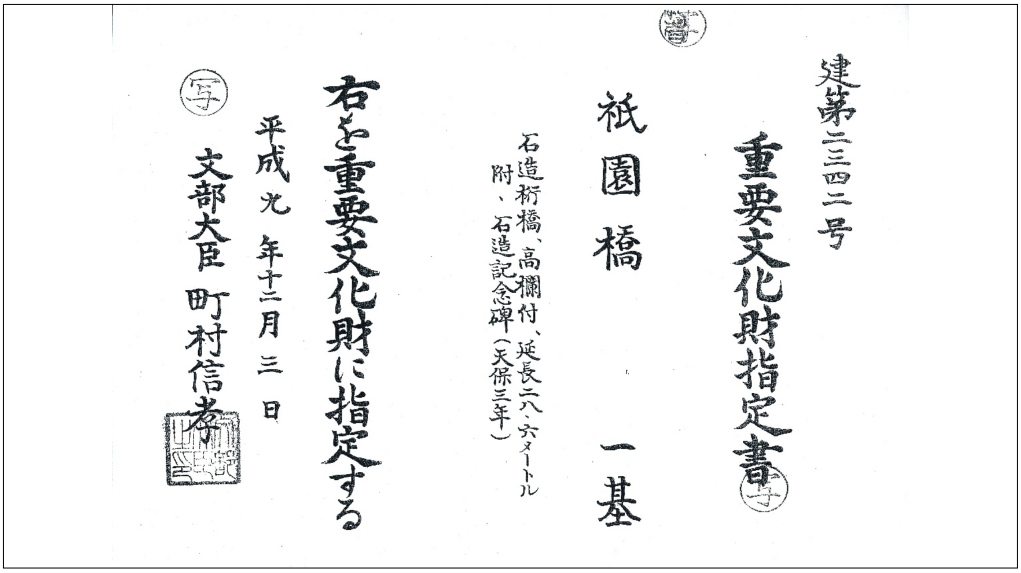
国指定重要文化財に指定されている、熊本県内の石橋

橋名	所在地	架橋年	構造	指定年月日
◇ **祇園橋**	/天草市船之尾町　中央新町	/天保三年（1832）	/石造桁橋	/H 9.12.03
◇ **霊台橋**	/上益城郡美里町	/弘化四年（1847）	/石造単アーチ橋	/S42.06.15
◇ **通潤橋**	/上益城郡山都町	/安政元年（1854）	石造単アーチ橋	/S35.02.09

架橋年が古い順・文化庁データベースより

（別に競うわけではないが、架橋の一番古い祇園橋が指定は一番遅い）

《重要文化財指定書・写（上）とデータベース（下）資料》



建第二三四二号

重要文化財指定書

祇園橋　一基

石造桁橋、高欄付、延長二八・六メートル
附、石造記念碑（天保三年）

右を重要文化財に指定する

平成九年十二月三日

文部大臣　町村信孝

国指定登録文化財等　データベース　・・国宝、重要文化財　文化庁　より
「http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp」

名称　：　祇園橋
ふりがな　：　ぎおんばし
員数　：　一基
種別　：　近世以前／その他
時代　：　江戸時代
年代　：　天保3
西暦　：　1832
構造及び形式等　：　石造桁橋、高欄付、延長28.65m
指定番号　：　02342
国宝・重文区分　：　重要文化財
重文指定年月日　：　1997.12.03（平成9.12.03）
重文指定基準　：　（五）流派的又は地方的特色において顕著なもの
所在都道府県　：　熊本県
所在地　：　熊本県天草市船之尾町、熊本県天草市中央新町
所有者名　：　本渡市
解説文　：　天草下島の本渡市市街地中央を西から東に流れる川に架けられた長さ約28.6m、幅約3.3mの長大な石造桁橋で、石材には下浦石と呼ばれる地元産の砂岩質の切石を用いている。橋の北岸側に残る記念碑によって、天保３年（1832）に地元の石屋によって建設されたことがわかる。江戸時代以前の石造桁橋としては現存最大のもので、石造アーチ橋が多い九州では、特殊なものであり、技術的にも注目すべき点が多い。

（平成八年二月九日文部省告示第六号）で定められています。参考までに、他の基準も列記して見ます。

重要文化財
建築物、土木構造物及びその他の工作物のうち、次の各号の一に該当し、かつ、各時代又は類型の典型となるもの
（1）意匠的に優秀なもの
（2）技術的に優秀なもの
（3）歴史的価値の高いもの
（4）学術的価値の高いもの
（5）流派的又は地方的特色において顕著なもの

祇園橋は、（5）のみの基準となっていますが、祇園橋はその他のいずれにも当てはまるといってもいいような気がします。ひいき目でしょうか。

Q17 天草・島原一揆での祇園橋近辺での戦いの様子は？

天草・島原の乱は、寛永十四（1637）年に起こりました。

ここは、乱について語る場ではないので、乱についての詳しい記述は避け、本戸での戦いについて述べたいと思い

祇園橋のほとりに建てられている、天草の乱激戦之跡の碑

ます。

乱については、多数の書籍が販売されたり、天草キリシタン館などの展示館がありますので、詳しいことを知りたい方は、そちらを参考にしてください。

といっても、正確な史料が残っていないので、詳しいことは分かりません。

ただ、細川藩史料によると、次のように記されています。

志柿の番頭は、味方の敗軍を救おうとしたが、崩勢に引きずられて退去した。亀の川の沢木七郎兵衛も、上下五十人で鉄砲を揃えて、一揆を防いだが、多く討たれ、止むなく本戸方面へ引き取った。

敗走する唐津勢は、本戸の町はずれにきて、幅三十間ほどの山口川の土橋を渡った。ところが、一揆が忍びを使ってすでにこの橋の中ほど一間ばかりを切り落としており、人馬もろとも川に落ちて死亡するものもあれば、死にかけたものも多く出た。

『細川藩史料による天草・島原の乱』戸田敏夫・新人物往来社

また、「四郎乱物語」には。

三宅籐兵衛陣中をかけ廻り引くな引くなと下知すれ共、なびき立たる大勢なれば、ふみ留まるものもなく、浜の手は小松原、今釜より中村さして引くもあり、山の手は町村より山口にかけ上がり、かけ道に出ずるもあり、中道は町村のはずれ舟ばしという大橋中ば落ちたるをしらず馬をのりかけ、かえさんとすれば敗軍の

天草・島原一揆関係書籍（順不同）

『西海の乱と天草四郎』鶴田文史
『天草四郎の陣中旗と首塚』鶴田文史
『島原の乱』神田千里
『天草四郎時貞、真実の預言者』今倉真里
『天の子　天草四郎』加来耕三
『天草時貞』岡田章雄
『島原の乱』助野健太郎
『九州キリシタン風土記』浜名志松
『天草・島原の乱』煎本増夫
『原城発掘』長崎県南有馬町
『天草の歴史』天草市教育委員会
『天草の歴史探訪』鶴田文史
『熊本県の歴史散歩』熊本県高等学校社会・・
『長崎県の歴史散歩』長崎県高等学校社会・・
『細川藩史料による天草。島原の乱』戸田敏夫
『新・天草学』熊本日日新聞社
『天草のこころ』北野則夫
『天草島原の乱とその前後』鶴田倉造
『Q&A　天草四郎と島原の乱』鶴田倉造
『街道をゆく　天草・・の諸道』司馬遼太郎
『郷土史辞典　熊本県』岩本悦・水野公寿
『富岡城物語』苓北町
『原城発掘』長崎県南有馬町
『天草近代年譜』松田唯雄
『肥後学講座Ⅲ』吉村豊雄
『四郎乱物語』天草キリシタン館　など多数

勢いさゝえ、為すかたなく水中に乗り落とし、馬をいため、歩立になる武士もあり、衣類兵具をぬらし、こごえてあがる武士もあり、今は一所につぼむべきようもなく、散々になりにけり。

『四郎乱物語』筆者不明・
天草キリシタン館刊より

ただし、細川藩は、この当時は参戦しておらず、また一揆側の史料が全く残っていないことから、正確には分かっていません。

四郎乱物語は、作者も書かれた年代も定かではありませんが、この中にも橋が落とされたとあります。

更に詳しく知りたい方は、この本渡合戦を題材にした歴史小説「町山口の血戦」を読まれることを勧めます。合戦の様子が生き生きと詳しくえがかれています。といっても、手に入らないと思いますので、読まれたい方は図書館まで足を運んでください。（収録・『西海の心・天草歴史文芸作品録』鶴田文史著・西海文化史研究所）

写真左　旧千人塚が発掘された地に建つ碑
（位置はp11の地図参照）

写真右　旧千人塚
（上写真の殉教公園の新千人塚の後ろに移築してある）
碑には「自中古有口碑
地蔵大菩薩
時人曰千人塚
安永二巳七月日」と刻まれている。

また余談ながら、この本戸合戦は、十一月十四日のことです。新暦に直すと、十二月三十日です。寒中に水中に落ちた兵士は、こごえた事でしょう。

また、当時の暦、太陰暦から月の満ち欠け、潮の満ち引きが分かります。

つまり十四日と言えば満月。天草本渡での満潮はだいたい9時ころ、干潮は15時くらいです。これは、現在のことですが、天体の動きは、悠久なものですから、多分当時も同じだったと思います。

乱は、祇園橋架橋より百九十五年前の出来事です。前述の史料が正確ならば、当時から橋は土橋であったが、橋が存在していたことが分かります。

土橋とは、先にも述べたように、木造の橋に、土を被せたものです。

また、祇園橋がかかっている現在の川幅は、29ｍですが、当時は祇園橋の下流にあったこともあり、かつ現在のように、河岸の埋立がされておらず、幅五十間、つまり90ｍほどもあった、かなり広い川幅であったことが分かります。

新千人塚・殉教公園

Q18　祇園橋に関しての文学は

祇園橋に関しての文学作品は、あまりないようです。

天草に関する文学をまとめた本として、昭和三十年初期に発行された、『天草の文学１・２』武藤光麿・編著　熊本国語研究会刊　があります。この本には、小説、戯曲、紀行、随筆、現代詩、漢詩、長歌、短歌、俳句、歌謡と天草に関する文学を網羅しています。調べてみましたが、祇園橋は全く登場していません。

ただ惜しい小説があります。それは「南国巡礼」という新村出博士の紀行文です。

彼は、祇園橋近くの喜久屋という旅館に泊まっています。当時の地図を見ると、現在の亜壽多のところです。橋の目の前に泊まって居ながら、祇園橋には全然触れていません。

数多い天草文学に、橋が登場しないのは、祇園橋が当時は世に殆んど知られていなかったためでしょうか。

〈歌碑の説明文〉

橋本徳壽先生は明治二十七年横浜に生れる。工学院卒。木造船技師。現代歌壇の長老で短歌「青垣」を主宰。著書として造船関係、歌集、歌論、実録戦記物など四十数部あり。

天草には造船講習会の講師として大正六年以来十数回来島、天草をこよなく愛し多数の天草詠や「天草日記」の著作あり。

歌碑はこの外に当市内の諏訪神社境内と大矢崎に二基がある

町山口川の　流れせきとめし　殉教者の
むくろ数百千にして　名をばとどめず
徳壽

橋本徳寿の歌碑

中央新町　町山口川河畔

ただ唯一と言えるのが、橋本徳寿の歌です。橋の袂には、この橋本徳寿の歌碑が建てられています。ただ祇園橋を詠んだ歌でなく、天草の乱本渡決戦を詠んだものであるのが、ちょっと残念です。

橋本徳寿は、碑の案内にもあるようにたびたび天草を訪れ、『天草日記』を著しています。この中には、祇園橋についての記述と短歌が数句掲載されていますので、紹介しましょう。

昭和27年9月23日（火）晴　ポスト、祇園橋

町山口に反りの強い石橋がある。細い石橋で祇園橋といふ、私はこの古い石橋が大好きだ。（この橋の附近があの寛永十四年の切支丹宗徒の反乱、天草の乱の激戦地で、敵味方の屍で川の水の流れが止まったそうだ）その石橋の石の欄干に真赤な大きな蒲団が三枚並べて乾かしてある。目が痛いほどの赤さだ。川水までが赤く染まってゐる。

9月28日（日）晴　強風　本渡の橋、繁華街、千人塚

寛永千人塚といふのがある。ナカムラ靴店の横、鍛冶屋のさき、狭い道を更に左に折れ、左に折れた所に、石の地蔵が四、五基あり、朽ちかけた屋根があり、朽ちかけた角塔婆が立ってゐる。かの寛永14年の天草の乱で、町山口川の流れをせき止めた、敵味方何百何千の戦死者殉教者の屍を、時人が哀れんでここにうめたのださうだ。

〈短歌〉

入り組める路地奥に『寛永千人塚』石地蔵四、五基角塔婆一本

本渡橋諏訪橋石の祇園橋あといくつある橋の名知らず

祇園橋の石の欄干にほされたる蒲団に川のゆく水赤し

天草五橋らくらく走り来し島にしばしなじめずただ古き祇園石橋

また浜名志松氏は、『土踏めば土のかなしみ』と言う歌集の中で、

祇園橋といふアーチ型の石橋もやや傾きぬ水渇れし川

天草の乱激戦の跡と彫られたる石碑傾き川の辺に建つ

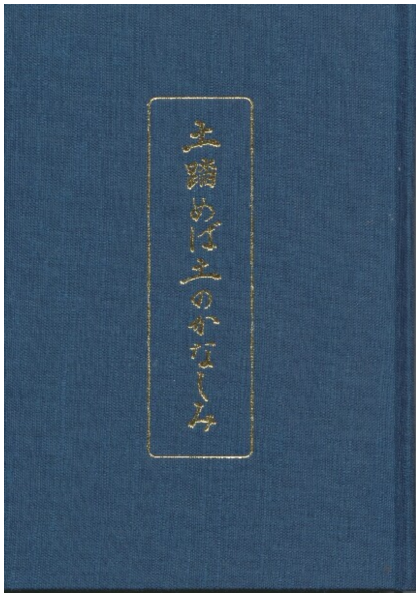
千人塚と伝へし古き墓碑一基彫られし銘も読みがたかりき

と詠んでいます。

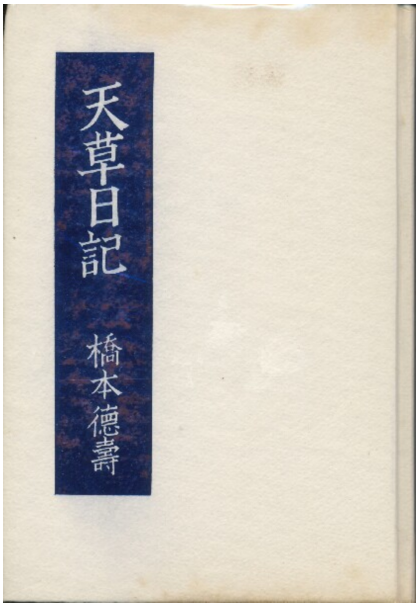
与謝野晶子の歌

船之尾町　故鶴田文史邸

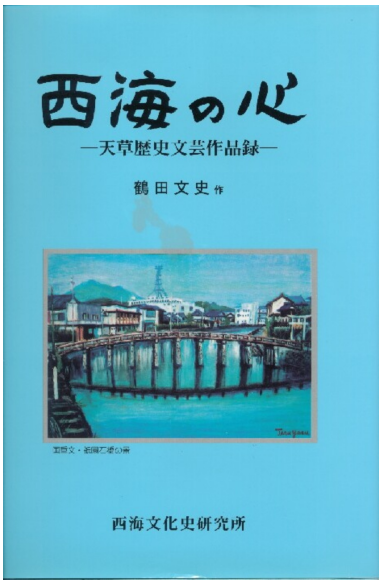
祇園橋に関する文学書等



『土踏めば土の悲しみ』
濱名志松著
平成８年10月12日



『天草日記』橋本徳寿著
本渡諏訪神社社務所発行
昭和49年2月11日



『西海の心』　鶴田文史
西海文化史研究所刊
平成17年12月31日
「天下の大石橋（祇園橋架橋物語）」
「夕映えの祇園橋」収録